

言水評点 前句付『誹諧愛宕土産』の翻刻注釈と研究

森 田 雅 也

一、はじめに

本稿は、関西学院大学図書館蔵「言水評点 前句付『誹諧愛宕土産』」（図書館資料名は『誹諧愛宕土産』のみ）の翻刻注釈と研究である。本資料は二〇一四年度に関西学院大学を会場校として開催された「第六十六回俳文学会全国大会」に併せて行われた、本学大学図書館展示「西鶴と談林俳諧」において、未公開資料として公開されているが、写真・翻刻等は公表しておらず初出資料である。資料公開翻刻ならびに写真掲載の許可をいただいた関西学院大学図書館に記して感謝申し上げたい。

二、書誌・解題

底本 関西学院大学所蔵本。

体裁 卷子本。一卷。

寸法 縦二三・三（糎）。長さ六米七六・〇（糎）。

言水評点 前句付『誹諧愛宕土産』の翻刻注釈と研究

成立 成立年不明。書写年次不明。



一軸であるが、以下の翻刻でも明白なように、序文に「一冊」とあり、手擦れの跡も確認できることから、元は袋綴りであつたと推察される。一紙の長さはおおむね、一六・五（糎）から一八・二（糎）。計三十八枚の紙を継いでいる。

鈍色布表紙。金切箔散らしの鳥の子の題簽に、「池西氏言水自筆評点／誹諧愛宕土産 可信編」とある。最終丁直前の「言水」の文字の特徴は現存する自筆「言水」の特徴を十分に有している。見返しは、金切箔散らしの鳥の子の紙。本文料紙は楮紙。一面に四句を基本としている。水濡れ跡、墨の滲み、虫損、やぶれなどあり、一部の文字が見えない。裏打ち補修を行っている。本文の書き誤りには薄様で隠しているが、編者可信が推敲の過程を伝えるためとも考えられる。ただし、最終丁の四行抹消は、辛うじて現物の画像処理より「家内へ 邊書（へんじょ）の礼は我身の外の文化拾手形の二篇のみを家内へ■■■■」と読めるが、これは卷子本に装丁した者か、後日に「冊子」を保有した者が私に古紙を用いて補訂した粗末さを伝える。その最終丁には本文とは違う手で再度秀句をあげているが、句に漏れがあり、

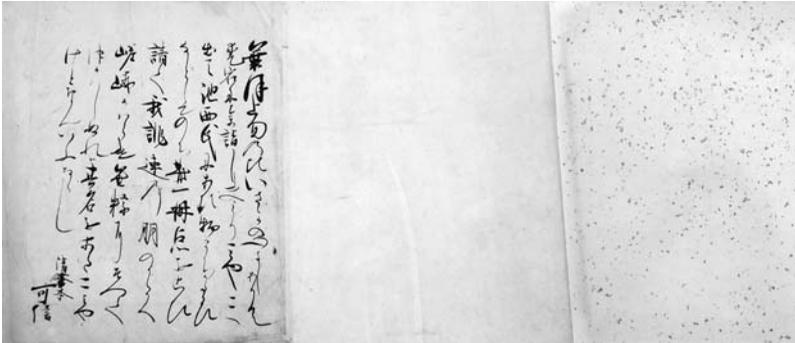
この字の主が卷子本への軸装を指示、あるいは実行をしたのかも知れない。卷子本としては成立は新しいように見える。一卷は桐材の印籠蓋箱に収納され、その中に墨書で「幽吟 俳人神戸氏 又友琴、幽琴、と云。別号、山茶花、識趣齋。寛永十年京都二生る。北村季吟二学び、後点二なる。地方俳壇を啓発す。宝永三年（一七四六）。没年七十四。」とするが、冒頭に「俳諧大辞典による」とあり、明らかに後日のものであるが箱書きとの関係から参考として付した。なお、末尾に「百壺句置」とありながら、私にふった句数は「百二句」であるが、「26 足弱（ヨハ）な女こまだす峠茶屋」だけが付墨もなく無点で、詠み人も不明であって、違和感がある。蓋し、この「26」を除けば句数の総計は「百一句」となつて符合している。

三、翻刻・注釈

【凡例】

- 一、本稿の底本には関西学院大学所蔵本を用いた。
- 一、翻刻に際しては、以下の事項を除き、原文の表記に従うことを原則とした。
- 一、旧字・異体字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、本文には読みやすさを考慮し、適宜句読点・濁点を付した。
- 一、本文中の句には、私に番号を付した。
- 一、注釈は※で示した。主に『謡曲二百五十番』『日本国語大辞典』を用いた。

【翻刻】



葉月上旬の比、いさゝかの心よしありて
愛宕に参詣し夫よりみやこへ

出て、池西氏にあひ、物うちかたらひ
などしてのち、再一冊点をこひ（乞ひ）
請て、

我誹連の朋のかたへ

嗟峨かはらけ、笹粽にそへて

つかはしぬれば、

其名を「あたごみや

げ」となんいふならし。

清書本可信

※「愛宕山」は京都市上嵯峨の山。山頂には愛宕神社本社があり、明智光秀「愛宕百韻」で知られるように古来連歌の場。江戸時代、愛宕山は遊山の場となり、山頂から素焼きの盃を麓に向かって投げる厄除けの遊び（「瓦け投げ」）が流行した。また、「笹粽」が愛宕土産であることは『出来齋京土産』（延宝五年刊）等にも見られる巷間では、「愛宕百韻」が愛宕威徳院で催された際、僧たちから光秀に笹粽がふるまわれたところ、「天が下」奪取の計で心ここに非ずの光秀が、笹ごと食した故事により愛宕名物となつたと伝えている。



9 辻堂の瘦蚊やせは肥る身みは瘦やせル 幽「吟」

10 〔翻刻〕へ なき人を算る物や珠数の粒 清言本 可信

十巻圖

11 へ 夜明には将基まさたをしの御伽侍 幽吟

俊寛とよひろが取のこされし嶋の内

12 へ 奥つ嶋ちんちろりんの声斗 可信

奥つ嶋ちんちろりんの声斗

13 へ 奥つ嶋ちんちろりんの声斗 法貴寺 松邪

長髪ながみの袋ふくろや土つちの釜かま

14 〔翻刻〕へ 娑婆しあはに飽り我レ鳴殺なごころせかんこ鳥とりモリヤ 幽吟

老おきなが身の命いのちを延のびス杜若つばき

15 へ 夢の夢ゆめづだの袋ふくろや土つちの釜かま 平田村

老おきなが身の命いのちを延のびス杜若つばき

16 へ 茸狩しんじゆのつれにはづれし夕端山ゆふはたやま 法貴寺

老おきなが身の命いのちを延のびス杜若つばき

17 へ 老が身の命いのちを延のびス杜若つばき 大木 孟我

老おきなが身の命いのちを延のびス杜若つばき

《書き損じのため、薄紙を貼り四行抹消》

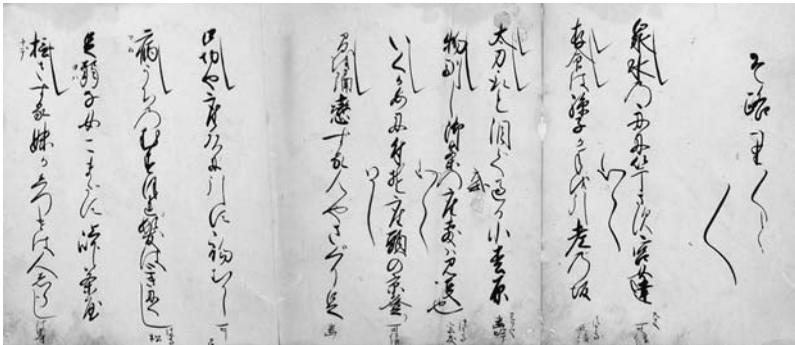
※「算る」は「かぞへる」。先に鬼籍に入った知人の数を数珠を繰って数えているか。

※「将基」は「将棋」。夜番の御伽侍も朝方には一人を残して将棋倒しのように寝ているという意外性の妙か。

※「隠岐」は海の奥にある意「類聚名物考」から「奥つ嶋」は「隠岐の島」を指す。後醍醐天皇流刑の閑居の呈か。

※市井の孤独を嘆く故の秀逸か。

※「端山」は人里に近く、孤独感なら「深山」とあるべきか。
※謡曲「杜若」の解釈が恣意的であるとの批点か。



そりりくとく

18

～ 泉水の舟に竿さす宮女達
わろし

大木 可信

※寝殿造りの舟遊びの場にふさわしくない竿さしの呈への批点か。

19

～ 存命は孫子が手を引老の坂

法貴寺 正信

20

～ 太刀取も泪で過る小松原

盛原
モリヤ 幽吟

21

～ 物馴し御茶の座敷は見事也

法貴寺 宗友

22

～ いくかめに付くぞ座頭の京登り

可信

わろし

※お点前の場そのもので工夫に欠くか。
※歩行の不自由さだけで工夫に欠くか。

23

～ 間を隔恋する人やさぐり足

幽

24

～ 口切や座頭に引す初むかし

可

25

～ 病うちのむすほれ髪はときにくし

法貴寺 松

26

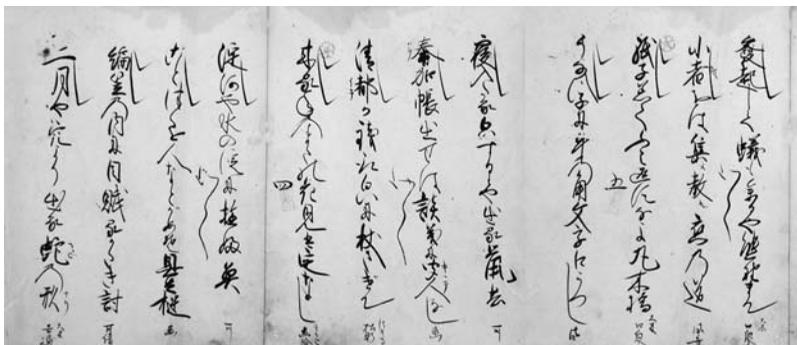
～ 足弱な女こまだす峠茶屋

27

～ 撫さする妹がしつけは人しらじ

法貴寺

※山道での元気がない牝馬の歩みの呈。



28 へ 発起して蟻も参るや熊野まで 大木 口泉

わろし

へ 小者をば集メ教ル恋の道 法貴寺

29 へ 紙子着てふみ返すなよ丸木橋 大木口泉

五

※慎重に渡らねば落ちれば、紙が水を吸つた重みで惨めな溺れ方になるぞとの嘲弄か。

31 へ うなひ子に牛の角文字口うつし 法貴

可

へ 寝入たる顔するや出る鼠共 可

32 へ 奉加帳出せば談義に聞人なし 幽

わろし

※辻談義を聞く人に喜捨目的と悟られぬため、奉加帳をそつと出すという意か。理屈くさい。

34 へ 清都が銭取顔に杖さげて 法貴寺 松邪

35 へ 来る年のまたの花見は定なし モリヤ 幽吟

四

36 へ 淀河や水の淀に遊ぶ魚 可

わろし

37 へ ごとつくを人などがめそ具足櫃 幽

編笠の内目賦るかたき討

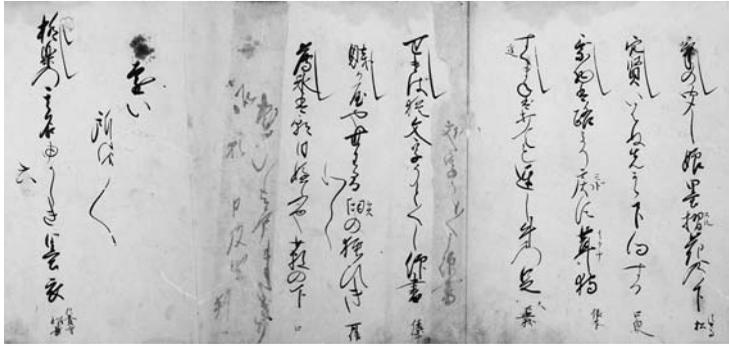
二月や穴より出る蛇の形

大木吉通

38 へ 編笠の内目賦るかたき討 可信

39 へ 二月や穴より出る蛇の形 大木吉通

※「目賦る」は「目配り」の意。



- 40 へ 気の聞し娘墨摺花の下 法貴寺
- 41 へ 穴賢いはぬ先から下向する 口泉
- 42 へ 乗物は路より戻す茸狩 依本
- 43 へ す、まねば打ても遅し牛の足 大 盃我
- 44 《書き損じのため、薄紙を貼り一行抹消》
へ せば猶文字うとくし仰書 依本
- 45 へ 賤が屋や世わたる白の独ひき 可信
わろし
- 46 へ 薄氷は朝日嫌ふや藪の下 口
《書き損じのため、薄紙を貼り二行抹消》
遠い
- 47 所にく
六圖 遊樂の其名ゆかしき墨衣 法貴寺 松義

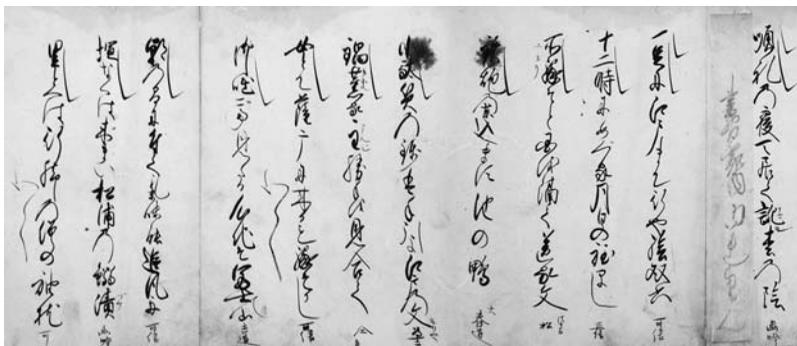
※「気の聞し」は「気が利く」の意。

※浄土真宗のお経は「あなかしこ」で終わるものだが、物慣れた僧はお経を唱え終わらない内から、徐に祭壇から下りてくる。

※「イグチ」はイグチ科の茸の総称。食用になる物が多い。採取時の呈か。

※遠くで奏されている舞曲に「墨衣」と聞こえたが、謡曲

『高野物狂』か『小袖曾我』か何だろ、気になるところだ、という意か。



48

〱 順礼の寝て居て詛る松の陰 幽吟

《書き損じのため、薄紙を貼り二行抹消》

〱 一足に江戸まで行や絵双六 可信

〱 十二時にめぐる月日の程早し 正信

〱 所縁ぞと国を隔て送る文 法貴寺 松

〱 鉄砲の薬込ます池の鴨 大 春道

〱 小駄賃の銭は手引よ江戸の文 モリヤ 為吉

〱 鍋薫る主勝手を見合て 同

〱 女とて薩摩に来るも縁ぞかし 可信

〱 御咄で見たる心地の富士山 吉通

〱 朝の間に付て気味能追風舟 可信

〱 垣なくは来まい松浦の鯛漬 幽吟

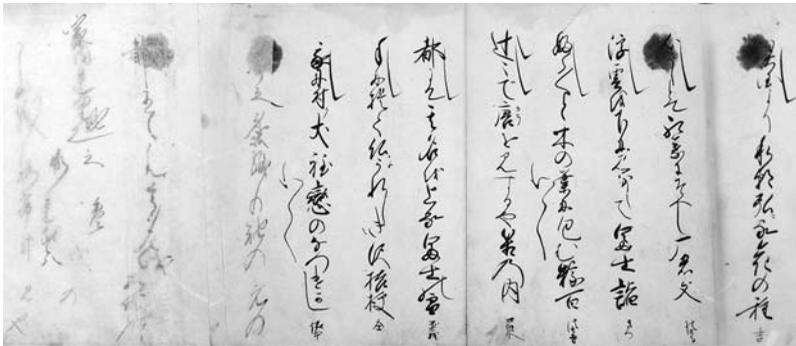
〱 里とへば行脚の僧の袖枕 可

〱 里とへば行脚の僧の袖枕 可

〱 里とへば行脚の僧の袖枕 可

※謡曲『葛城』か、詞章不明が
わろしか。

※謡曲『俊寛』か、詞章不明が
わろしか。



60

〱 異国より朝顔弘まる花の種 吉

61

〱 心ざしとて紅葉にそへし雁の文

法貴寺

62

〱 浮雲を下に見なして富士詣

さつ

わろし

63

〱 ふうらくと木の葉に包む粽百 法貴寺

わろし

64

〱 辻々で唐カウを見するや箱の内 口泉

65

〱 都にて其名を上る富士の雪 盃我

〱 手に提て仏うれしき沢桔梗 同

〱 家に付て犬程恋のなつけかし 俵本

わろし

《書き損じにより薄紙を貼り二十行程抹消しているが最終丁のような後日の貼紙などあり解読不能》

※「なつけかし」は「なつけ（懐

く）+かし」か。意味不明。

※「のぞきからくり」を詠んだか。

※「浮雲」は古歌にも詠まれて

いるが、富士山の雲海にふさわしくなく、わろしか。

※「粽」を笹ならぬ「木の葉に包む」がわろしか。句意不明。



71 70

借てまよとまよなりとまよりの中
 公達の筆は威のある大和哥
 舟一つこえて大津は京らしき
 幽

※「舟一つ」という交通手段が
 わろしか。大津は「大津馬」
 が有名。

69

借てまよとまよなりとまよりの中
 借へて憂き上着にならぬ肩のゆき
 法貴寺松

68

何所ぞが
 違フ物也
 継子とて隔て見せぬ後の母
 法貴寺正信

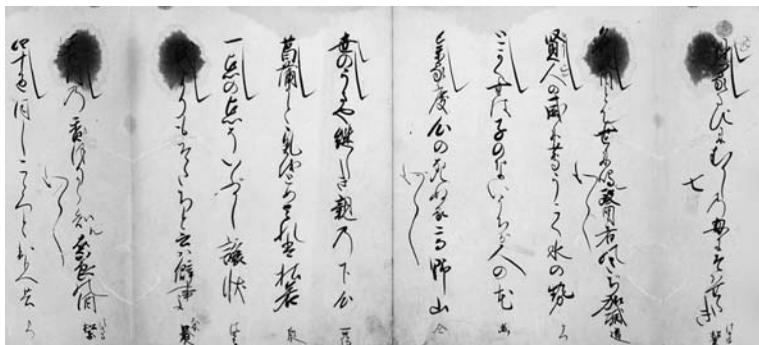
※「後の母」は後添いの意。

どうで

何所ぞが

違フ物也

十式



72

〱 見るたびにむかしの母にそはせたき

法貴寺松義

※亡父の面影に似た人との邂逅か。

七〇

〱 名醫として世に鳴ル醫者のさち加減

道

※「鳴る」がわろしか。

賢人の面影に似たる人のむかしの母にそはせたき

賢人の面影に似たる人のむかしの母にそはせたき

〱 賢人の威に罵うごく水の勢

さつ

※「罵うごく」要因が「聖人」か「水勢」か、という意か。

賢人の威に罵うごく水の勢

賢人の威に罵うごく水の勢

〱 とかく世は子のないうちが人の花

幽

※「死ぬる」がわろしか。

とかく世は子のないうちが人の花

〱 参る度心の死ぬる高野山

同

※「継(まま)しき」は「なさぬ仲」の意。「下心」は「心底」の意。

参る度心の死ぬる高野山

〱 世のうさや継しき親の下心

可信

〱 一点の点ぞいぶかし譲状

泉

一点の点ぞいぶかし譲状

〱 菖蒲かと気をとめみれば杜若

法貴寺

菖蒲かと気をとめみれば杜若

〱 氏よりもそだちと云は僻事よ

大木 口泉

氏よりもそだちと云は僻事よ

〱 吞内の香ほりから知ル奈良の酒

法貴寺松義

吞内の香ほりから知ル奈良の酒

〱 四十過同じこゝろとおもへ共さつ



83

〱 氏筋性遣覚し木は檜

法貴寺

※「氏筋性」は「うじすじょう」、「遣覚し」は「つかえおぼええし」と読むか。

84

〱 半ナガの夜や過ネビヘて寝寒ネビヘの秋の風

依本

※「寝寒（寝冷え）」は夏の季題。

《貼紙の下は書き損じか、落書か不明》

なぶりし

迹は

気の

どくなもの

85

〱 小娘のうらみを請し袖の内

法貴寺松義

わろし

※袖の内は艶書なのか小金なのか、句意不明。中途半端さがわろしか。

86

〱 色里の恋は暗嘩ハラフベの種となる

同

〱 童ハラフベはあしやら実コトにするならひ

正信

※「あしやら」の「やら」は「やる」で「だます」か。「悪

ふざける」の意か。



- 88 〇〇へへよはりてはうら打かへす金魚ギョども
可キ信
- 八〇
- 89 〇〇へへ禪家は小僧なれども賢くて
九〇
- 90 へ腕押と論に成けり抜刀
幽吟
わろし
- 91 へ借錢の根継に産し娘の子
通
- 92 へ軽カサシメし後に手をもむ坊主落
法貴寺一谷
- 93 へ胎内の子さへ科負世イキツの習
可
- 94 へそだちとて生踏イキツをみかく薩摩者
吉
- 95 へ振袖に打かへさるゝ文礫ツツ
通

※元禄期に金魚ブームがあったことは『西鶴置土産』にも記事があるが、「金魚すくい」がすでに行われていたか是不明。

※修行に厳しい禅宗寺では稚児も賢くて、寵愛されれば泣き寝入りはしないという句意か。

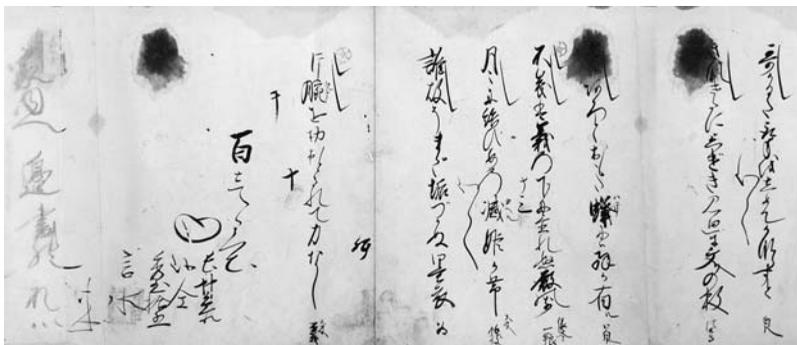
※さらば「腕押（腕相撲）」と穏やかに挑みながら、最後は唐突に刀を抜き合わせる矛盾がわろしか。

※「根継」は親より受け継ぐこと。

※「坊主落」は坊主が墮落して還俗すること。

※当時の「薩摩者」への共通認識か。典拠不明。

※投げ返された「文」は艶書、恋文。



96

へ 哥がるた取手をしめてかならずと

わろし

泉

97

へ さなきだにしげき見廻す文の数

法貴寺

98

へ はりあるとおもた蟻ハチには羽が有ル

口泉

99

十三箇 へ 不義は義の下に置れぬ殿の前 依本一

100

へ 月々に結びめの減へ姫が帯 大木

へ 誰故ぞまだ垢づかぬ墨衣 為

102

十箇 へ 片腕を切おとされて力なし 大木 孟我

干

十箇

百壹句置

(花押) 長草参

※「哥がるた」は当時すでに普及していた百人一首の類か。

※「取手」に何を強要しているのか、得意札が絡むのであろうが、句意不明。

※「さなきだに」は副詞的用法の連語。「ただでさえ」の意。多くの艶書の発覚に取り乱す様子か。

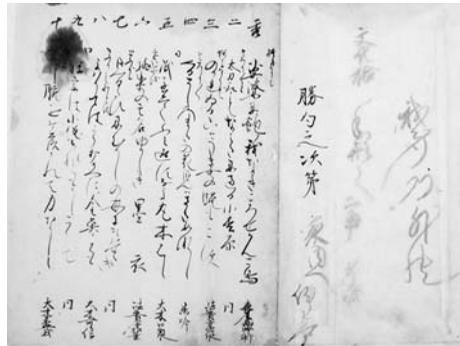
※「蟻」の上に「蜂」を上書きし、「ハチ」とふるが、「蟻」でこそ句意は通る。

※「不義は御家の御法度」の時代の常識か。句意は不明ながら悲惨な末路を言うか。

※懐妊による腹の膨れか。

※未婚の女人の出家を詠むか。

※弓の名手、平忠度のような討ち取られ方が故事にせよ、一般論にせよわかりやすい。



以同
秀玉拾五
言水（印）
《貼紙により四行抹消。書き損じではなく落書か。》

勝句之次第

- 独になりて
秀 娑婆に飽ク我なきころせかんこ鳥
森屋幽吟軒
そりりくと
二 太刀取となみだに過る小松原
同
独になりて
三 のがれるる山はうき世の蠅もこず
法貴寺岸水
そりりくと
四 くとしのまたの花見はさだめなし
幽吟
同
五 紙子着てふみ返すなよ丸木ばし
大木口泉
遠い所に
六 極楽の其名ゆかしき墨衣
法貴寺松義
どぶで
七 見るたびにむかしの母にそはせたき
同
なぶりしあとは
八 よはりてはうら打かへす金魚ども
大木可信

※「言水」の署名は、正亀小扇
撰言水評点『俳諧之哥仙』
（正徳四年）、『都曲』、『続都
曲』等から自筆としてよい。

同

九 禪家は小僧なれどもかしこくて

同

十 片腕を打落されて力なし

大木盃我

五、内 容

本資料は「一、はじめに」でも記したように、池西言水が評点した前句付評点書の新出資料である。可信による序文によれば、某年八月上旬、京都の愛宕山参詣（注釈にも示したように土産の内容からして京都市右京区の北西部にある上嵯峨の愛宕（あたご）山で、現在の京都市北区・左京区にまたがり大原などがある古来の山城国愛宕「おたぎ 郡ではない」の帰りに洛中の言水宅で親しく交流した縁により、後日、この「一冊」に点を乞い、俳友たちに愛宕山ゆかりの土産の粽と土器を添えて配ったので、この前句付を『愛宕土産』と名付けた、とある。序文終わりに「可信」と自署とあり、その肩書きに「清書本」とあるので、この一巻は可信が冊子として「我誹連の朋」におくったものを後日、可信ならぬ第三者が一巻に仕立てたということにならう。しかし、言水自筆評点であることに間違いはなく、池西言水の雑俳活動を知らる上で貴重な資料といえる。また、後述するような時期の前句付評点とすれば、誹諧史を探る上でも重要な位置にある資料である。

『愛宕土産』に参加している連衆は十六名前後。「可信」「幽吟」「京都の俳人友琴（宝永三年没）の別称も幽吟ながら、「森屋幽吟」とは別人と考えるべきである」「口泉」「盃我」等の号もあるが、「さつ」「正信」「松義」のような通称とも思われる名で記されている。いずれもが、「可信」自身も「法貴寺」と名乗るが、「法貴寺」を始め、「俵本」「大木」「森屋」「平田村」は現在も地名が残る「奈良県磯城郡田原本町（ならけんしきぐんたわらもとちよう）」近在の

地名である。この辺りは大和川（初瀬「はせ」川）上流域に位置する古くからの水田地帯で、『角川歴史地名大辞典』「法貴寺」の項によれば、飛鳥時代の「法起寺」伽藍の一部であったことかこの地の由来となっており、近世期は綿作地域として栄え、「元禄郷帳」では千三百七十七石余のうち幕府領八百八十四石余・水野氏知行四百七十五石余・寺領十七石余とあることから富農支配の豊かな土地であったことがわかる。

この豊かな綿作地域「法貴寺」を中心とした地域に地方俳諧文化圏が育った経緯は、三田浄久（二六〇八一—一六八八）が河内木綿流通文化圏を利用して『河内鑑名所記』〔延宝七（一六七九）年刊〕にみるような俳諧文化圏を形成した事情に似ているかも知れない。「可信」なる俳人についての先行研究は全く不明であるが、おそらく社会的には「法貴寺」の有力な流通ルートを握るリーダー的人物であったのではあるまいか。三田浄久が松永貞徳、北村季吟、安原貞室といった貞門派に師事しながらも、談林派の井原西鶴らと親交があったことを知るとき、「可信」の俳歴を知らないまでも貞門から談林、そして京都俳壇に興味を持ったことは地方俳壇として同様の流れであったのではあるまいか。そのとき、格好の俳諧の宗匠として「池西言水」に注目し、点を乞うこととなったのである。しかも池西言水の出自は奈良であり、同郷の士である。それでは誰を介したのか。可信の序文からは京都在住時の言水との邂逅であるから、京都の俳人であろう。しかし、はたまた、三田浄久である可能性も捨てきれない。地理的近隣さ、同業者の可能性などを根拠とするが、今後の調査課題となろう。

さて、「池西言水」とは『俳文学大辞典』（角川書店）項目担当の宇城由文氏によれば以下である。

俳諧師・雑俳点者。慶安三（一六五〇）～享保七（一七二二）・九・二四〔海音集〕、七三歳。本名、池西則好。通称、八郎兵衛。別号、兼志・紫藤軒・洛下童・鳳下堂。大和国奈良の人。一六歳で法体し俳諧に専念した

『海音集』。曾祖父の千貫屋久兵衛は奈良大年寄を務め、祖父の良似は和歌に通じ、実父の柳似も俳諧を嗜んだ。道具屋を家業とするか。師承については、江戸在住時代に幽山・春澄など維舟（重頼）門の俳家との親交が見られるが、「維舟の流れを汲」〔『海音集』〕む以上の関係はなく、むしろ維舟の名を京移住後の俳諧活動に利用した観がある。（「閩歴」以降は略）

まさに言水は父祖以来の奈良の人であるが、田原本町との関係は不明である。以下、宇城氏の「池西言水年譜」を付して詳述すべきであろうが、言水は奈良の人というより、江戸へ出て俳諧活動を行った後、全国を行脚し、京都に定住した俳人であって、奈良との地縁は不明である。奈良に居た時から江戸においても骨董商として生計を立てていた（田中善信氏）という説は、言水が元禄期に地方俳壇への勢力を急に拡大する俳家としての活動圏の広さと付会し、魅力的ではあるが作風に直結しているとは言い難く、新しい傍証資料を待ちたい。

いずれにせよ、『愛宕土産』の成立時期は序文に書く顛末からは、言水が江戸を離れた京都在住時以降であるから、少なくとも天和二（一六八二）年以降ということになる。天和期以降の言水が雑俳に力を注いだことは知られていゝる。そうすると、言水が雑俳で京の地歩を固めていった天和、貞享・元禄期を『愛宕土産』の成立時期と推定してよいのではなからうか。この頃、「當年之和州義又ハ今井ニモ、はいかい打絶罷在候所」「浄久（老）宛祐貞書簡」とあるように和州路や大和地方には俳諧が絶えたかがごとき、前句付俳諧のブームであった。川柳に先立つ前句付雑俳が奈良でいかに隆盛を見たかは、荻野清氏の「平野良弘と雑俳」のご論考（『俳文学叢説』所収）に詳しい。言水と同時代の同郷奈良御所出身の平野良弘の雑俳に関する見識は頗る高い。荻野氏はそのご論考の中で「平野良弘撰の）『高天鷲（たかまうぐいす）』以下の書によれば、雑俳の浸潤は御所の一地方のみならず高田・桜井・五条・郡山をはじめ

め、あまねく大和一円に及んでゐたのである。」とされているが、『高天鷲（刊年不明・序文からは少なくとも元禄九年以降成立）』の連衆を見る限り、言水を含め、奈良の自立った地域からの参加が認められる。その中に「俵本（田原本）」の俳人四人を認めるが、『愛宕土産』の俳人は誰もいない。

「平野良弘」こと「鶴寿軒良弘」は「元禄に入る頃には、既に揺るがぬ貫禄を近在の大衆から仰がれたであらうことを推察せしめる」（荻野氏）ほどの雑俳の第一人者であったが、その見地から雑俳の点者としての言水に対して痛烈に批判を浴びせた俳人としても知られている。特に良弘は言水の高点句をあげ、「ハメ（釘）句」を見破れない点者として晩山らとともに言水を名指しで批判している。「ハメ句」とは、「既往に一度発表せられた自身または他人の発句や付句を、再び新たな発句題にあてはめて点者の許に提出することをいふ」（荻野氏）もので、良弘とすれば「ハメ句」を禁じてこそ前句付俳諧の秩序が保たれるのである。そして、その秩序を守るのが雑俳の師匠としての見識であり、その見識が欠如している者こそ言水だと言うわけである。

その良弘の言水批判をそのままとすれば、『愛宕土産』で言水が選んだ秀句にも「ハメ句」が含まれている可能性があるのである。ただ、『愛宕土産』の言水高点句が「ハメ句」であるかどうかは幾つもの手続きとともに精査を必要とするであろう。

そればかりか、もしも可信以下の「法貴寺」周辺の連衆が「ハメ句」が含まれていることを知った上で、「京」の前句付の権威者「言水」から高い評点を得、その名声によって地方俳諧文化圏、特に和州において、確固たる地位を得ようとしていたなら、彼らは恐ろしくしたたかな狼藉者集団であったこととなる。しかし、彼らに別の資料がない限り地方の有力俳壇として評価すべきで、むしろ、奈良における良弘と言水の点者としての対立そのものが「法貴寺」を含む「田原本」周辺の俳人を二分した可能性を思ふのである。むしろ、素朴に『愛宕土産』の成立を天和・貞

享期の早い時期と考えれば、若い頃の言水の好評、初期前句付の俳諧師の前句付の好評の傾向を知る手がかりして貴重な資料となる。ともかくにも、俳諧師としての言水が江戸と上方、さらには九州・四国など地方俳諧文化圏の俳諧師とを結びつけた功績は認められており、このたびの新出資料『愛宕土産』は、天和・貞享・元禄期の貞門俳諧と蕉門俳諧の狭間で揺れ動いた談林俳諧の消長と関係深く、これからも研究する意義は大きいといえる。

参考文献

- 荻野清著『元禄名家句集』（創元社 一九五四年刊）
平林治徳編著『三田浄久』（大阪女子大学国文学研究室 一九五四年刊）
荻野清著『俳文学叢説』（赤尾照文堂 一九五四年刊）
雲英末雄著『俳書の話』（青裳堂書店 一九八九年刊）
宇城由文著『池西言水の研究』（和泉書院 二〇〇三年刊）
雲英末雄監修『元禄時代俳人大観』（八木書店 二〇一一年刊）
牧藍子『元禄江戸俳壇の研究』（ぺりかん社 二〇一五年刊）
田中善信著『元禄名家句集略注 池西言水篇』（新典社 二〇一六年刊）

付記

翻刻と注釈については、「33」の句までは二〇一四～二〇一五年度にかけて開講した森田の大学院演習で検討した。雲岡梓、辻田徹が前半年度、三川莉紗、遠藤真央、後藤京が後半年度出席し、朴ナリと吉田健剛は二年間参加した。その意味では、共著とすべきかも知れないが、冒頭からの書誌・注釈・内容等は森田単独の研究成果である。ただ、翻刻作業については一部雲岡梓氏のノートに拠っている。

平野良弘撰『高天鷲』の閲覧・調査は「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」を用いた。記して感謝したい。

本稿は文部科学省科学研究費助成金事業基盤研究（C）課題番号「2450252」（森田雅也代表 平成二十四年度～平成二十八年度）「地方談林俳諧文化圏の発展と消長～西鶴の諸国話的方法との関係から～」の研究助成を受けている。

（もりた まさや・関西学院大学文学部教授）